山城教育局管内

1　桃山養護学校の取組

(1) 教育局と養護学校との連携

①教育局と共催で「ももやま土曜講座」を開催

桃山養護学校では、平成15年度より特別支援教育推進校として 地域のセンター的役割発揮」と **専門性向上**」という二つの目標をもって実践をすすめてきました。この「土曜講座」は、その一環として、地域の保護者や教職員、関係機関等の方々への情報提供、研究・実践の支援として計画し運営してきました。

平成18年度は「**理解から実践を通した支援へ**」をテーマに

講座	講座のテーマ	講師	参加者
1	軽度発達障害児を担任している先生方へのティーチャー・トレーニング	藤原壽子（中学校教諭） 林素賀子（中学校教諭）	276名
2	軽度発達障害のある人への就労・生活支援	戸田幸彦（関電特例子会社かんでんエルハート参与）	195名
3	自閉症スペクトラムと社会性 （ソーシャルストリーなどを使ったＳＳＴ）	門眞一郎（京都市児福センター精神科医）	348名

３回の講座を開催し延べ、８１９名の参加者を得て、上記の目標は達成することができました。意見交流での主な意見は

- 特別支援教育において、子どもひとり一人のニーズに応じた教育をしていく為には、教師の意識改革が必要であると感じた。まずは、テクニックより子どもを丸ごと捉える目を持たないといけないと思う。ＡＤＨＤやアスペルガーの担任でトレーニングを受けたい。（第１講座）
- 今回の講座の内容は、**教職員研修で全校で学びたい内容でした。問題行動が起こる前の行動観察の重要性を痛感しました。未然に防ぐことを心がけたいです。**（第１講座）
- 発達障害の子どもの保護者です。学校で社会で子どもが困難にぶつかった時、将来を悲観的に考え親子で落ち込んでしまうことが有ります。でも、先生のお話を聞きビデオを見て勇気づけられました。一歩一歩できることをあきらめずに頑張っていこうと**前向きな気持ちになりました。何か子どもに適した仕事を見つけたいです**。（第２講座）
- **ソーシャルストーリーが子どもを褒める為にある**ということが一番印象的でした。ともすると親や教師の思いを押しつけたり問題行動を軽減または止めさせる為に使ったり、指示に服従させる為に使っていたと気付き反省しました。また例にあげられた文章が使えそうなものばかりで役に立ちそうです。ダメな例文も参考になりました。（第３講座）
- ものすごく勉強になりました。学校での実践、支援をしていく上で**講座等できちんと学習**することが本当に大切だと思いました。とてもいい機会でした。（第３講座）
- ももやま土曜講座のような講座を地域で実施していただき有り難い。参加者の多さに学習への意欲がわきます。（各講座共通）

→１９年度も内容を検討し継続の予定です

（2）保育園・幼稚園での実践

特別支援教育の理解が進んできて、保育園・幼稚園から**自由遊びの時は目立たないけれど設定遊びになると**　①約束が守れず我がままを通そうとする子
②自分の席から立ち上がりウロウロする子
③周りの友だちにいたずらをする子
④先生が話しをしている時に突然口を挟みしゃべり出す子　等々

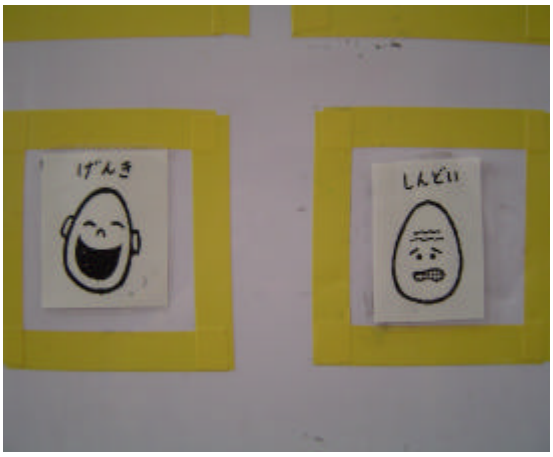
ととらえられていた子ども達に対して軽度発達障害（自閉症スペクトラム圏）の疑いがあるのではと、保育に携わる方々の視点が変わってきました。そこで園側から教育相談窓口コーディネーターのところに下記のような依頼がありました。

高機能自閉症と診断された園児がいます。全職員で共通理解して指導にあたりたいので、障害理解と支援についての研修会の講師をお願いします。

養護学校からの支援	①園への参観、園児の実態観察（自由保育、設定保育） ②アセスメント票を書くためのアドバイス ③学習会の中味を検討し提案
研修会の内容	①自閉症スペクトラムについて講演 ②本児のケース検討 ・集団として本児をどう見ていくか、他児にどう説明していくか。 ・場面の切り替えについて、写真カードでのスケジュール説明の方法 ・よい行動を褒め、正しい行動を教えていく。 ・表出のコミュニケーションのスキルの弱さ（よく喋るが）があるので感情カード、フィーリングメーターの紹介 ・トイレの自立にむけてトイレットトレーニングの資料提供

本児の実態より五つの項目でアドバイスを行いました。園での本児への理解が進み過ごしやすい毎日であること、小学校へのスムーズな移行支援が行われることを願っています。

感情カード（自分の体調を伝える時に使用）フィーリングメーター（感情のレベルを伝える）



（3）校内委員会と特別支援教育コーディネーターの機能充実を図る

地域の学校の巡回教育相談を通し、特別支援コーディネーターからアスペルガー症候群の子ども達と実際に関わってみたい、関わることを通し保護者や担任への支援を進めていきたいという意見が出されました。そこで、校内委員会と特別支援コーディネーターの機能充実と力量の向上を目指して**夏休み・冬休み親子・教師教育相談会**を本校の教育相談を受けた児童を対象に、計３回実施しました。山城教育局、宇治市・八幡市の教育委員会の理解を得て以下のような内容で行いました。

①内容

児童に対して、ＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）
保護者に対して、ペアレントトレーニング
担任に対して、ティーチャーズトレーニング

②ねらい

・教育相談後の子ども達の様子を把握する。（学校）
・相談時の緒言についての検証を行い、今後のより適切な教育相談を目指す。（学校）
・支援プログラムを保護者や教師に提示し、今後の実践に生かす。（保護者、担任）
・保護者、担任同士のグループカウンセリングを通して、共通の悩みを出し合ったり情報交換を行い、家庭や学校で生かせるようにする。（保護者、担任）

③参加者

児童４名（内１名は欠席）：障害名　アスペルガー２名、自閉症２名
保護者３名
担任、小学校通級指導教室担当者、中学校通級指導教室担当者
養護学校側　：　児童対応（４名）保護者対応（２名）担任対応（２名）

成　果

・　子ども同士の遊びの中でのトラブルの要因に直接触れることができ、担任の先生に伝えることができた。
・　子どもの行動や言語に巻き込まれない大人の在り方を再度話し合った。
・　簡単なチェックリストで保護者に自分自身のタイプを知ってもらった上で、子どもの接し方の配慮点についての話をした。保護者からは自分の行動を振り返る声が聞かれた。

チェックリスト・・・Ａ・Ｂ　各８項目を５段階で評価

Ａの項目例	１	やらなければならないことを先送りにする
	２	つまらないミスをする
Ｂの項目例	１	興味のない話を聞いているだけの会合では、席を立ちたいと思う
	２	衝動買いなどよく考えずに行動することがある

・　継続した教育相談の機会となった。
・　２学期にある運動会、文化祭の取組について担任と話ができた。
（行事向けの支援シートを作成し支援）

（4）保護者や地域社会の理解、啓蒙

養護学校では、障害を持つ子ども達が地域で理解され、よりよい生活ができることをめざして学校間交流や居住地交流に取り組んでいます。
相手校の学校では、養護学校に通う同じ地域の友達と仲良く交流し、いつでも声をかけあえる関係を築き深めていくことをねらって取組が進められています。

○○小学校の居住地交流では、

① ４年生の児童は事前に養護学校の紹介ビデオを見て学校の様子を知り疑問点をまとめる。
② 当日は、養護学校の教師が事前の疑問に答えながら、養護学校のこと、障害のことなどについて４年生に分かりやすく話をする。
③ 本人とお母さんの紹介をし４年生とゲームを通し交流する。
④ 障害児学級と交流
⑤ 給食交流（近所の子ども達と一緒に） のプログラムで行った。

成果 ２校で子どもの実態や取組内容について十分な打合せを行うことで、自然な形で交流ができ、ねらいを達成することができた。

○○小学校では、総合的な学習の時間（全45時間）に居住地交流の取組も含んで以下のような取組がされています。

ふれる 養護や障級の友達と仲良くなる。友達を知ろう。（居住地交流も含む）
校区の友達を知ろう。どんな勉強をしてるのかな？

つかむ さらに障害のある人について知ろう。
ビデオを見る。（車いす、点字等）

むかう 肢体障害について調べる。
車イスで外出してみよう。車いすを使っている方との交流
調べたことや聞いたこと、体験したことをまとめて発表する準備

いかす 発表し交流する。
手話、点字を用いたり車いす体験から学んだことを生かしてできることを実行しよう。

このような取組を体験することで、障害の有無にかかわらず相手を認めて受け入れられる素地を持った子どもになってほしいと願っています。

（5）巡回相談

特別支援教育の流れのなか、教育局と連携をとりつつ巡回教育相談を行っています。今年度の巡回教育相談の特徴としては、高等学校からの相談が倍増したことがあげられます。

平成19年度より各高等学校に特別支援校内体制が整備されることになっており、これまでの「生徒指導」という捉え方に「発達障害・特別支援」という捉え方が加味されるなど、ますます養護学校との連携が広がると思われます。

今年度は下記のような相談がありました。

〔注意：あくまでも授業参観や、細かいアセスメント等に基づく相談例であり、同様の現象を示す児童生徒すべてにあてはまる回答なわけではありません。〕

Q　成績不振（定期テストの点数が一桁）の生徒の単位認定について、また進級についてどのように捉えれば良いか。

A　（生徒の授業参観後）学習内容は、生徒の実態に合わせた分かりやすさにし、量も少なくたり、補習参加やレポート提出を努力点として認めたりすることも一案。

Q　就職希望の生徒と保護者にどのような段階を踏んだ対応をすればよいか。

A　（生徒の実態等を聞き取りした後）実習先として調理関係とリネンの事業所を紹介。実習にあたっての指導内容（実習のかまえや留意点等）や保護者への説明内容、今後に向けてハローワーク等の利用についても話をした。〔養護学校の進路指導担者が対応〕

Q　進路に対するこだわりが強いが、現状では実現しそうにないという現実に向き合えない。また不登校でうつ傾向にある。どのように指導したらよいか。

A　校長先生か進路指導部長など、担任とは違う立場の方に「単位不足では卒業できない。卒業できなければ進路実現はない」ことを話してもらう。また教科ごとに色別グラフを作成して、本人にあとどれくらい出席すれば単位がとれるか視覚的に提示する。別室で試験をすることや保護者と本人に医療機関の受診を勧める等。

Q　遅刻や欠課が多い。自分の思い（込み）を阻止されると暴力をふるう、話題が会話中に自分の興味のある方向に変わっていき、双方向でない。授業中、制服をかぶって寝ているが、時々質問に答える。等の実態をどのように捉え指導すればよいか。

A　（高校の事例検討会に参加し、判断仮説や支援仮説を共に考えるというスタンスで）生徒の言動の原因を生徒指導上の課題ではなく、発達障害によるものであることを確認した上で、

- １対１対応ができる場所、時間を確保（各教科補習プリントで単位保障と感覚過敏に対する対応の仕方）
- 目標（卒業、進学）を設定して具体的にどうすれば目標達成できるか示す。
- 本人・保護者も納得しているので早急に医療受診をする。

その他の相談内容・助言等

- 校内でクールダウン用の場所探し、内部の構造化についての相談にのる。
- 「あなたの強みはここ、弱みはここ」と視覚的に示す資料を作り、生徒に提示する。
- 担任の教師と日常的なメールでのやりとりを行う。